

防災歳時記 (29)

—黒い雨と白い雨—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

黒い雨が降る

1945(昭和20)年8月6日朝8時15分ごろ、広島市の上空高度8,500mを飛来した米機は、人類最初の原子爆弾一発をほぼ市街地の中心に向かって投下した。原爆は地上600m付近の空中で爆発し、瞬時にして全市の家屋をほとんど破壊し、二十数万人の死者を出し、市内の大部分で火災が発生した。この悲惨な事実は全世界を驚きふるえあがらせ、日本の終戦を早めるきっかけとなった。

爆発の5~30分後から火災の黒煙があちこちに上がり、終日大火災による塔状の巨大な積乱雲が上空を覆った。午前11時から午後2時にかけて、大火災に伴う猛烈な竜巻が市内を流れる太田川の流域で発生した。その威力は強力で、鉄板、ドラム缶などから人間までを巻き上げ、駅の客車が自然に動き出した。

爆発と火災に伴って激しい夕立のような雨が広島市北西方で降り、雷鳴がとどろいた。爆心地から北西方の山間部までの長径19km、短径11kmの楕円形を示す地域で、土砂降りの豪雨が降り、1~2時間も降り続いた。



写真1 旧広島地方気象台

せる積乱雲が爆心地付近から北西方に流されたためだった。降水量は50~100mmに達した。

雨水は、爆心地帯から立ち昇った黒いちり・ごみを含んでいたため墨汁のように黒かった。黒い雨水には、多量の放射性降下物を含んでいたため、河川や池沼の鯉、ウナギなどが白い腹を見せて浮き上がり、雨水を飲んだ牛や人も下痢を起こして苦しんだ。

井伏鱒二の小説「黒い雨」に次の文がある。一午前十時ごろではなかったかと思ふ。雷鳴を轟かせる黒雲が市街の方から押し寄せて、降ってくるのは万年筆ぐらみな太さの棒のような雨であった。真夏だといふのに、ぞくぞくするほど寒かった。雨はすぐ止ん

だ。一

写真1の旧広島地方気象台は市内中区の江波山にあり、原子爆弾の直撃を受けた。庁舎・測器などは甚大な被害を受けたが、現在は修復され被爆建物として働江波山気象館に転身した。今でも建物の壁にガラス破片が無数に突きささり、光を当てると怪しげに輝く。

なお、長崎市でも8月9日の原爆投下直後、爆心から12km圏内で「黒い雨」が降った。

白い雨が降る

信州の南木曾地方に、「白い雨が降ると蛇抜けが起こる」という言い伝えがある。

蛇抜けとは、土石流、山津波、山崩れのことをいう。九州の筑後地方では「竜抜け」という。土石が流れ落ちるとき、先端が盛り上がり、蛇がかま首を持ち上げるような格好になるので「蛇抜け」と呼ぶようになったとの説がある。また、「抜ける」とは山が崩れることをいい、山崩れの常襲地に「抜山」などという地名がある。

瀬戸内沿岸には、「視界がきわめて悪く、辺りが降る雨で白っぽくなったり、雨水が棚田の畦を越して一面滝のように水があふれたりするときは、山が危い」という山崩れ防止の伝承がある。

激しい雨のとき、空から落ちてくる大きな雨粒が空気の抵抗を受ける。すると、しぶきをあげるようになり、そのために辺り一面、白っぽく見える。

ゴーゴーと、なだれ落ちる滝さながらに、大地をたたくすさまじい大夕立、視界のすべてを白一色に閉じ込める。その激しさは、



写真2 江波山から爆心地を望む（1999年）

白い雨の名にふさわしい。

国語辞典を見ると、白雨とは、ゆうだち、にわか雨とある。

「雨の強さとその時の状況」を次のように説明する（気象庁などの資料による）。

○1時間に50～80ミリ（非常に激しい雨）滝のようにゴーゴーと降る。水しぶきで辺り一面が白っぽくなり、視界が悪くなる。車の運転は危険。都市では地下街などに雨水が流れ込む場合もある。土石流が起こりやすい。多くの災害が発生する。

○1時間に80ミリ以上（猛烈な雨）息苦しくなるような圧迫感がある。恐怖を感じる。大規模な災害の起こるおそれが強く、嚴重な警戒が必要。

近ごろは、地球の温暖化もあって、1時間に100ミリを越すような猛烈な雨が降りやすくなっている。日本での最大1時間雨量は187ミリで、長崎豪雨（1982年7月23日）のときに観測された。長崎市周辺の住宅地で発生した土石流などのため、県内で299人が亡くなった。今年は長崎豪雨から20年たった。

黒い雨も白い雨も降っては困るのである。